

立石 友男 著

『海岸砂丘の変貌』

大明堂 1989年3月

B5判 214ページ 2,800円

この本は、著者が長年にわたって精力的に携わってきた海岸砂丘に関する研究の一環として、とくに庄内平野に関する研究を中心にまとめたものである。題名はやや漠然とした印象を与えるが、その内容を検討すると、著者の苦心が窺われる。この本は、著者の重要な研究領域の一つである林業地理の研究とみなすこともできるし、砂丘林を通して自然と人間との関わり合い方の変遷を究明しようとした歴史地理学的研究とみなすこともできる。また、砂防工学の研究や庄内砂丘地域の地誌的研究として優れた成果とみなすことができる側面をもっているからである。

本書は、多くの写真、図、表を用いた実に詳細な研究書で、その構成は序章と終章をはさんで6章からなる。内容の概略をまず紹介しよう。

序章「海岸砂丘林研究の意義と課題」では、海岸砂丘林に関する従来の研究、研究対象地域、研究課題について述べている。ここでは、わが国における海岸砂丘林の歴史が概観され、海岸砂丘林は荒廃と復興を繰り返しつつ推移してきたことが指摘されている。主として人間による砂丘林の伐採と造林がその原因であるが、このプロセスを庄内砂丘を例に解明することが、本書の第一義的目的である。その事実を通して、海岸砂丘と人間との関わり方の変遷を考察しようとするのが著者の研究の立場である。また、研究対象地域を、とくに庄内砂丘とその後背低湿地にしばった理由も述べられている。庄内砂丘地域では古くからさまざまな形態の植林が試みられ、その記録に比較的恵まれていることや、その結果、砂丘形態にも特色がみられることがその理由である。

第1章「砂防植栽開始前後の庄内砂丘と后背低湿地」では、砂丘の荒廃化と后背地の湿地化が記述されている。庄内砂丘は一般に、藩制時代初期には戦国時代以前からの製塩や打ち続く戦乱によって、すでに荒廃していた。そのため后背地では、砂丘からの飛砂によって河床が上昇したり、小河川が埋没したり、内水湛水が起り、一層の湿地化が進行した。ここでは、このような砂丘の荒廃化や后背地の湿地化を古文書記録から検討し、次に小字地名（谷地）や集落発達の状況からかつての湿地の分布の復原を

試みている。

第2章「庄内砂丘における藩制時代の砂防植栽」では、藩制時代の植林の実態が施業主体ごとに記述されている。第1は、宝永4（1707）年に植付役の制度が発足してからの庄内藩による植林事業である。第2は、大庄屋を中心とする砂防植栽、第3が本間家などを中心とする酒田町人による砂防植栽である。

第3章は、「庄内砂丘における入会林野の成立」を扱っている。なぜここでこのようなテーマが扱われているかという点、入会林野の成立は砂丘の植栽と密接に関係していたからである。近世期において耕地の生産力を維持するには緑肥の施肥が不可欠で、その採取地としての農用林野は農民の関心事であったばかりでなく、徴租を通じて領主の関心事でもあった。しかも、庄内砂丘地域では、18世紀の中頃から新田開発にともなって谷地が減少し、林場の不足が深刻になった。そのため砂丘に入会林野が設定された。しかし、砂丘の入会林野が成立するには、その前提として砂丘の砂防植栽を実施せねばならなかったからである。なお、庄内藩の林制については第2章でふれられている。

第4章「明治政府の林野政策にともなう海岸砂丘林の変容」では、庄内地方における官民有区分事業の実施状況と、それに対する地元民の反応を扱っている。庄内地方の地租改正事業はいささか拙速であったので、事業実施直後から部分林の設定や官林の払い下げ運動が展開された。その経緯が詳述されている。また、明治初・中期における乱開発の状況についてもふれられており、この章は、次の5章と6章の理解を容易にするための章となっている。

第5章は、「明治年間以降における海岸砂丘林の造成」を記述している。明治初・中期の乱伐や耕地化によって飛砂の被害がふえ、庄内地方においては明治30年代に入って本格的な砂防事業が行われるようになった。ここでは旧袖浦村と旧西荒瀬村の村営砂防事業と、国有林における、とくに第二次世界大戦後の砂防植栽事業が取り上げられている。

第6章「明治年間以降における海岸砂丘の開発」は、最上川をはさんで北部と南部の砂丘は開発や利用や保全といったさまざまな点で異なる経緯を歩んできたが、それらの各々から調査事例地域を選び、主に地籍図を利用しながら、明治期以降の耕地の開発過程や利用の実態を明らかにしている。この章におけるもう一つの重要な内容は、高度経済成長期以

降の砂丘の開発と変貌である。酒田北港建設にともなう変貌と、昭和40年代以降の揚水ポンプやスプリンクラーの普及にともなう砂丘農業（とくにスイカ、イチゴ、メロンなどの野菜栽培）の発達が扱われている。

終章が「海岸砂丘にみる自然と人間のかかわり」で、ここでは砂丘形態が自然的因子の側面からだけでなく、とくに砂防技術や植林といった人間の行為によっていかに影響されてきたかが論じられている。

いささか心もとない紹介であるが、以上が本書の概略である。冒頭に述べたように、さまざまな側面をもつ本書の価値を限られた紙数で述べることは不可能である。ここでは、印象的な二、三のことを記すに止めよう。

著者の研究史の検討で明らかのように、砂丘の固定作業や利用の変遷に関する系統的な地理学的研究はこれまでほとんどなされてこなかった。著者の言によれば、砂丘（砂丘林）は、時代の経済的要求や技術水準に翻弄されながら、荒廃と復旧を繰り返してきた。これは、砂丘が人々にとって利用しうる空間ともなるが、一方ではその保全に大きな労力と費用を要するといった相反する側面をもつことによる。それどころか砂丘は、保全が不十分であれば、人々の生産基盤をも危うくする存在である。評者も、そのような性格をもつ砂丘の保全義務や利用はいったいどのように行われてきたのか、その所有の権利関

係はどのようにして確立されてきたのか疑問に思ってきた。この本は、これらの疑問に明快な回答を与えてくれる。これらの実態を明らかにしえたことは、地理学ばかりでなく、歴史学を含む他の学問分野にとっても大きな貢献となるだろう。

本書は歴史地理学的研究手法を学ぶのに一つのモデルとなりうる良書と、評者には思われる。地方文書、統計、地籍図、地形図を十二分に活用し、フィールドにおける野外観察も見事である。とくに、自然現象への深い理解が窺われる。これらの研究手法はオーソドックスなものといえるが、しかし、あらゆる手法を駆使することはそんなにたやすいことではない。また、綿密に過去の復原作業を行いながらも、最終的目標をあくまでも通時的考察においてることなども、評者は高く評価したい。

この本は、研究書であるため、当然のことながら教科書の親切さはない。各章は、かなりの独立性を保っている。しかし、評者のように、ここで扱われている全てのテーマに必ずしも通暁していない読者もあろう。ないものねだりかもしれないが、各章末に、著者の意図を含むまとめの項目がおかれていたなら、本書はよりわかりやすいものになったと思われる。もちろん、このような小さな欠点が本書の価値を損うものではないことはいうまでもない。著者が長年収集した豊富な資料とスケールの大きい構想に基づく本書は、砂丘地域研究の必携書となるだろう。

（石井英也）